

## 出光真子 おんなのさくひん——ある映像作家の自伝

2026年6月18日（木）－9月21日（月・祝）



01



02

01, 02 《Still Life》1993-2000年 ミクストメディア 東京都写真美術館蔵 ©Mako Idemitsu 02のみ 撮影：阿久井長則

出光真子（1940-）は、日本における実験映画およびビデオアートの先駆的な作家です。1960年代にアメリカ滞在を経て制作を始め、女性の生き方や家族、メディアと社会の関係を主題に、フィルムや当時のビデオを用いた作品を発表しました。とりわけ1970年代以降のビデオ作品では、テレビ・メロドラマの語法を取り入れながら、母と子、夫婦関係、女性の社会的役割といったテーマを独自の視点から描き出しています。近年は、ジェンダーや身体をめぐる国際的な議論の高まりのなかで、その実践があらためて注目されています。

東京都写真美術館では、2016年～2017年度に出光真子のフィルム/ビデオ全作品および主要なインスタレーション作品を収蔵しました。本展は収蔵後初公開となる作品を含め、出光の創作活動の全貌を振り返る大規模な回顧展です。当館で収蔵する全作品を、展覧会と上映により網羅的に紹介します。

※本展タイトルにある「おんなのさくひん（What a woman made）」は、映像作家・出光真子の評価を決定付けた、初のビデオ作品（1973年）\*のタイトルを用いています。\*3ページ図版07を参照

### 出光真子 Idemitsu Mako

1940年、出光興産創業者・出光佐三の四女に生まれる。お茶の水女子大学附属小・中・高から早稲田大学第一文学部に進む。卒業後ニューヨークへ留学。抽象画家サム・フランシスと結婚。二児の母。妻であり母であることを超える創造表現への想いやみがたく、映像作家の道を進む。自身の経験からフェミニズムをベースに、家庭における親と子、表現者として女性が生きる際の社会的摩擦などを問いつづける。著書に『ホワット・ア・ウーマン・メイドーある映像作家の自伝』（岩波書店、2003年）、『ホワイトエレファント』（風雲舎、2011年）など。



@Studio Idemitsu

## みどころ

### 1 日本における実験映画・ビデオアートのパイオニア、出光真子の大規模回顧展

出光は1960年代末、当時暮らしていたアメリカ・サンタモニカで映像制作を始め、フィルム/ビデオ/インスタレーションという映像形式を横断しながら、30年以上にわたり約50点の作品を制作しました。当館はインスタレーションを含む43点を所蔵しています。本展では展示と上映を組み合わせ、これらを一挙に公開し、出光の創作活動の全体像を紹介します。フィルム時代の作品から、ビデオアートの黎明期における独自の映像世界まで、体系的にご覧いただけます。

### 2 家庭や社会をめぐる視点を、現代のまなざしで捉え直す

出光が画家サム・フランシスと結婚し移住した1965年は、アメリカで女性解放運動が活発化した時期でした。二人の子どもを育てながら、娘、妻、母という社会的役割と、アーティストとしての自己との間で葛藤を抱えつつ制作を続けた出光。鋭い観察眼で自身の日常と社会を見つめ、男性主導の社会構造や日本的な家庭観を描いた出光の作品は、作品発表から30年以上を経た現在においても、女性を取り巻く性や社会のあり方を見つめ直す契機を与えてくれるでしょう。

### 3 フィルムからビデオへ——映像表現の多彩な魅力

出光はフィルムからビデオへと表現の場を広げ、それぞれのメディアの特性を活かした多彩な映像を生み出しました。16mmフィルムの〈At〉シリーズでは、日米を行き来する出光自身の心象風景を繊細に描き出しました。一方ビデオ作品では、画面内に別のモニターを映し込む「マコスタイル」など、ビデオならではの手法を展開します。さらに1980年代のビデオ作品では、テレビドラマのように物語性が強まり、演出の魅力にも富んだ作品へと発展していきます。本展は、こうした表現の変化と広がりをもたらす構成となっています。

### 4 インスタレーション作品5点を公開

1976年の《祖母・母・娘》以降、出光は全8点のインスタレーション作品を制作しました。本展では東京都写真美術館所蔵の3点に加え、作家蔵の2点をあわせた計5点のインスタレーションを、展示室内外で紹介します。

### 5 40作品をホール上映、ニュープリントによる16mmフィルムの上映も

1階ホール(定員190名)では、出光の作品40点を9つのプログラムで上映します。《Woman's House》、《At Yukigaya 2》など一部作品はニュープリントによる16mmフィルム上映を予定しています。

### 6 出光真子の全活動を網羅する展覧会図録

出光真子氏および1980年代以降の作品制作を支えたカナダ人ビデオアーティスト、マイケル・ゴールドバーグ氏のインタビューを収録します。そのほか、斉藤綾子氏(映画研究者)、笠原美智子氏(写真評論家、長野県立美術館館長)および当館担当学芸員による論考(一部転載)、作品リスト、年譜、展覧会歴、ビブリオグラフィを掲載予定です。

#### お得な鑑賞料金のご案内(リピート割・上映割など)

映像作品の鑑賞環境への配慮として、本展の鑑賞済みチケットをご提示いただくと、別日に本展を2割引(団体料金)でご覧いただけます(チケット1枚につき1回限り)。また、本展チケットのご提示により、上映プログラムも2割引でご鑑賞いただけます(チケット1枚につき1回限り)。さらに、8月6日(木)~28日(金)の木・金曜日の17時~21時は夜間特別開館を実施します。学生・高校生は無料、一般および65歳以上の方は団体料金でご入館いただけます(学生証・年齢確認書類の提示が必要)。

## 出品作品（抜粋）

[フィルム作品]



03

《Woman's House》1972年

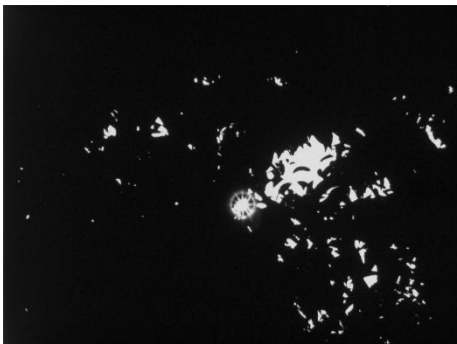
美術家ジュディ・シカゴらが1971年に企画した「ウーマンズ・ハウス」展を出光が訪れ、撮影。学生とともに古い家を改装した展示空間での実践を記録し、約1年の編集を経て最初の16ミリ作品として完成させた。



04

《Inner Man》1972年

渡米後、ユング心理学に触れた出光は、本作で女性の内なる男性性「アニムス」を描く。着物の女性と裸の男性が重なる映像には二重焼き付けの技法を用い、対立する要素を並置する手法は、後の作品でも展開された。



05

《At Yukigaya 2》1974年

男児2人を育てる中、フィルムを買いに出る時間のない出光は、自宅にあった映画のタイトルやクレジット撮影用のハイコントラスト・フィルムを使って撮影した。高感度を活かし、光に反応するガラス片や木漏れ日、新幹線の灯りを捉え、日米の狭間にある自身の心象風景を表現した。



06

《At Santa Monica 3》1975年

本作もハイコントラスト・フィルムを使用し、数年間暮らしたサンタモニカの家と周辺の風景を撮影している。光と影の動きや水面の反射、光の明滅などを捉え、抒情的でありながら実験的な趣を持つ。出光は、フィルムは日常とは別の世界を作り出し、ビデオは日常を映し出すところだと語る。

[ビデオ作品]



07

《おんなのさくひん》1973年

1973年の夏、帰国した際にビデオ上映会へ出品を打診され、初めてのビデオ作品を制作。白黒オープンリール機材を用いて、トイレに浮かぶ使用済みタンポンを撮影した。初めて作品上映の機会を得た出光は、以後日米を往復し制作を続けた。本作品は、映像作家・出光真子の評価を決定付けた初のビデオ作品（1973年）であり、本展のタイトルに用いられている。



08

《主婦の一日》1977年

出光自身が出演し、主婦の日常を長回しで捉える。巨大な目がモニターに映り込み、絶えず被写体の主婦＝出光自身を監視している。社会的につくられた主婦という立場が、世間の目から形成されるだけでなく、彼女本人の内なる目によっても内面化されていく様子を描く。モニターの入れ子構造は「マコスタイル」として後の代表的手法となっていった。



09

《英雄ちゃん、ママよ》1983年

《シャドウ パート1》(1980年)から、カナダ人ビデオアーティストであるマイケル・ゴールドバーグとの協働が始まり、以降のビデオ作品は、シナリオに基づいた演出と、音も同時に記録ができるという技術面に支えられた表現が特徴と言える。本作は独立した息子に執着する母を描き、日本における、子の自立を母自身が阻害するような関係性に疑問を投げかけている。



10

《清子の場合》1989年

画家志望の清子は両親の意向で結婚し、家事と育児に追われて創作の道を閉ざされる。自己表現への欲求を抑えきれず、追い詰められていく女性の内面と悲痛な叫びを描く。パリで画家を志すも苦悩の末に急逝した長姉に捧げられ、海外でも高く評価された。

[インスタレーション作品]



11

《加恵、女の子でしょ!》1996年

芸術家カップルの葛藤を描いた本作では、家事や夫の制作補助に追われる主人公が、抑圧に抗い、自らの制作を取り戻す姿を描く。作中には出光のインスタレーション作品《Still Life》(1993-2000年)が登場する。物体への映像投影などのこれまでの作品で取り組んだ手法を組み合わせ、集大成とも言える作品となった。



12

《Still Life》1993-2000年

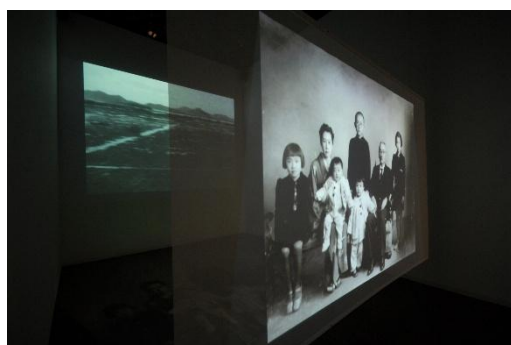
男女を象徴する二つのオブジェに映像を投影。アンスリウムの花の造形は男性性を想起させ、対となる形は女性性を示す。過去の作品でも見られた、花びらを剥ぎピンで留める反復や、降り落ちる紅い花びらが心の葛藤や矛盾、身体性を象徴している。サウンドは現代音楽家・高橋結生が担当。(撮影：阿久井長則)



13 14

《Real? Motherhood》2000年

「母性」を主題とする作品。ガラスのベビーベッドに、我が子を抱く自身の写真と、哲学者バダンテールによる『母性という神話』からの引用テキストが重ねられる。片側には十字架、もう一方には「強迫観念」「神話」など内面の言葉が刻まれ、ベッドは棺のイメージを帯びる。子供の誕生と同時に女性としての存在を葬る場として表現された。(画像はThe Third Gallery Ayaでの展示 撮影：松岡広樹)



15

《直前の過去》2004年

家族と戦争をテーマとした本作では、幼少期の出光自身の家族写真に戦争の記録写真が重ねられる。家族における父親の支配、そして家父長制と男尊女卑の価値観と恐怖により、女性が個を捨て、役割が強いられる。その構造が、暴力によって他者を支配する戦争の原理に繋がることを、個人的な記憶と社会的な記録を交差させ描く。(画像は栃木県立美術館での展示 撮影：市原隆行)

すべて東京都写真美術館蔵 ©Mako Idemitsu

出品点数 45 点（予定） ※上映プログラムを含む

	作品名	制作年	作品時間	所蔵
1	Woman's House	1972	13分40秒	東京都写真美術館蔵
2	Inner Man	1972	03分40秒	東京都写真美術館蔵
3	Next	1973	03分30秒	東京都写真美術館蔵
4	おんなのさくひん	1973	11分00秒	東京都写真美術館蔵
5	At Santa Monica 1	1973	05分30秒	東京都写真美術館蔵
6	At Santa Monica 2	1974	03分40秒	東京都写真美術館蔵
7	Baby Variation	1974	08分00秒	東京都写真美術館蔵
8	At Yukigaya 1	1974	03分00秒	東京都写真美術館蔵
9	At Yukigaya 2	1974	11分10秒	東京都写真美術館蔵
10	At Santa Monica 3	1975	15分30秒	東京都写真美術館蔵
11	Something Within Me	1975	09分30秒	東京都写真美術館蔵
12	At New Mexico 1	1975	12分30秒	東京都写真美術館蔵
13	At Any Place 1	1975	16分00秒	東京都写真美術館蔵
14	At Any Place 2	1975	03分00秒	東京都写真美術館蔵
15	主婦の一日	1977	09分50秒	東京都写真美術館蔵
16	At Any Place 3	1977	03分40秒	東京都写真美術館蔵
17	At Yukigaya 3	1977	02分30秒	東京都写真美術館蔵
18	At Any Place 4 : ヨネヤマ・ママコ作 「主婦のタンゴ」より	1978	12分30秒	東京都写真美術館蔵
19	At Any Place 5	1978	12分00秒	東京都写真美術館蔵
20	At Karuizawa 1	1978	08分10秒	東京都写真美術館蔵
21	Make Up	1978	09分00秒	東京都写真美術館蔵
22	At Yukigaya 4	1979	16分00秒	東京都写真美術館蔵
23	主婦たちの一日	1979	21分50秒	東京都写真美術館蔵
24	シャドウ パート 1	1980	25分30秒	東京都写真美術館蔵
25	わたしのあめりか、あなたのあめりか	1980	10分00秒	東京都写真美術館蔵
26	父の情景	1981	05分50秒	東京都写真美術館蔵
27	シャドウ パート 2	1982	41分40秒	東京都写真美術館蔵
28	アニムス パート 1	1982	13分10秒	東京都写真美術館蔵
29	アニムス パート 2	1982	19分40秒	東京都写真美術館蔵
30	通りゃんせ	1982	12分20秒	東京都写真美術館蔵
31	英雄ちゃん、ママよ	1983	27分00秒	東京都写真美術館蔵
32	グレート・マザー 晴美	1983	13分00秒	東京都写真美術館蔵
33	グレート・マザー ゆみこ	1983	24分30秒	東京都写真美術館蔵
34	グレート・マザー 幸子	1984	18分50秒	東京都写真美術館蔵
35	たわむれときまぐれと	1984	16分00秒	東京都写真美術館蔵
36	ざわめきの下で	1985	11分00秒	東京都写真美術館蔵
37	やすしの結婚	1986	25分20秒	東京都写真美術館蔵
38	洋二、どうしたの？	1987	18分00秒	東京都写真美術館蔵
39	清子の場合	1989	24分20秒	東京都写真美術館蔵
40	加恵、女の子でしょ！	1996	47分00秒	東京都写真美術館蔵
41	Still Life	1993-2000	インスタレーション	東京都写真美術館蔵
42	Real? Motherhood	2000	インスタレーション	東京都写真美術館蔵
43	直前の過去	2004	インスタレーション	東京都写真美術館蔵
44	祖母・母・娘	1976	インスタレーション	作家蔵
45	女たち	1977	インスタレーション	作家蔵

## 上映

出光真子の40作品を9つのプログラムで上映します。

上映日 | 6月18日(木)~20日(土)、7月9日(木)~12日(日)、8月27日(木)~30日(日)、  
9月17日(木)~20日(日)

料金 (1プログラム) | 一般・シニア 500円 学生・高校生以下無料

※本展チケットをお持ちの方は、1枚提示した場合、1プログラムを400円でご鑑賞いただけます(本展チケット1枚につき1回限り)。

会場 | 東京都写真美術館 1階ホール 定員 | 190名

上映スケジュールおよびプログラムの詳細は、決定次第公式ウェブサイトで発表します。

## ゲストによるトーク

6月20日(土)16:00~ 笠原美智子(写真評論家、長野県立美術館館長)×小勝禮子(美術史、美術批評)

7月11日(土)16:00~ 斉藤綾子(映画研究者)×菅野優香(映画研究者、同志社大学大学院教授)

9月19日(土)16:00~ 柚木麻子(小説家)×伊藤春奈(編集者、文筆家)

会場 | 東京都写真美術館 1階ホール 定員 | 190名 参加費 | 無料

※手話通訳、文字表示支援付き

当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布します。

## 担当学芸員によるギャラリートーク

文字表示支援付き | 6月26日(金)14:00~

手話通訳付き | 7月24日(金)、8月21日(金)、9月18日(金)各日14:00~

観覧会チケット(当日有効)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

## 開催概要

観覧会名 [日] 出光真子 おんなのさくひん—ある映像作家の自伝

[英] Idemitsu Mako What a woman made

会期 2026年6月18日(木)~9月21日(月・祝)

主催 東京都、東京都写真美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)

会場 東京都写真美術館 2階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <https://topmuseum.jp>

開館時間 10:00-18:00(木・金は20:00まで)、入館は閉館30分前まで

※8月6日(木)~28日(金)の木・金曜日は夜間特別開館のため21:00まで開館

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館し、翌平日休館)

観覧料 一般 700(560)円/学生 560(440)円/高校生・65歳以上 350(280)円

※( )は有料入場者20名以上の団体料金。中学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)、TOPMUSEUM PASSPORT 2026提示者は無料。第3水曜日は65歳以上無料。

※8月6日(木)~28日(金)の木・金曜日17:00~21:00は夜間特別開館による割引料金(学生・高校生は無料、一般・65歳以上は団体料金。学生証・年齢が確認できるものをご提示ください。)

※**リピート割** 本展チケット提示で1回のみ、別日に2割引(団体料金)で本展をご鑑賞いただけます。(本展チケット1枚につき1回限り)。

※事業内容は諸般の事情により変更する場合があります。

## このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

\* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

\* オンライン媒体への図版掲載は作品保護の観点から、長辺800～1,000ピクセル以下をご利用ください。

\* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館  
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan Tel 03-3280-0034 [www.topmuseum.jp](http://www.topmuseum.jp)

展覧会主担当 田坂博子、遠藤みゆき（東京都写真美術館 学芸員）

広報担当 池田、坂田、上田 [press-info@topmuseum.jp](mailto:press-info@topmuseum.jp)